



『地酒 BAR イーハトーヴォ』の後藤さんのご紹介で、今回は陶芸家の成田尚さん取材させていただくことになりました！成田さんの工房には年季の入った窯小屋や作業小屋があり、母屋には成田さんの器がズラリと並んでいます。陶芸の世界に入ったら、何が見えるのでしょうか。さあ、未知なる世界にいざゆかん！

写真右 / 岡部町の土を混ぜて焼かれた、素朴で上品な肌合いの花瓶。成田さんの作品です。  
左 / 『工房あさひな』の作業場で器作りに打ち込む生徒さん。

『工房 あさひな』

陶芸教室（月2回） /

日時：毎月（第1・第2）日曜日・火曜日  
13:00～15:00

※月謝等の詳細は直接お問合せ下さい。  
※一日体験コース…2～3時間（¥5,000）

つくろい教室（壊れた器の修理） /

日時：毎月（第1・第2）日曜日・火曜日  
10:00～12:00

※月謝等の詳細は直接お問合せ下さい。



編集長まめこの  
まめまめ  
放浪記

成田 尚（なりた しょう）

『万耀自得窯』

〒421-1101 藤枝市岡部町玉取 217-1  
Tel/ 054-668-0408 Fax/054-668-0072  
HP/ <http://kobo-asahina.com/>

冬の優しい光が差し込む日本民家の室内には、幾つもの器が並んでいた。その中でも飾り気のないザラついた肌合いの陶器に、ふと目が止まった。地面からツツと現れたような器たち。なぜか土筆を連想し…生き物の気配を感じた。

器の作者は成田尚さんという。若い頃、土探しの旅に出かけては色々な土地の土を持ち帰って焼くうちに、土の性質が分かるようになったそうだ。なんと、現在は岡部の土も混ぜて制作されている。陶芸の土は産地が限定されていると思っていた私は、身近な土地の土からも器が生まれてくることに、新鮮な驚きを感じた。改めて器に目を向けると、…んん？壺になにやら不思議な絵が描かれている。

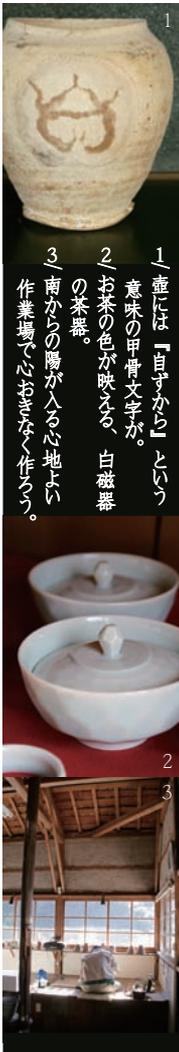
「それはね、『自ずから』って意味の甲骨文字なんです。漢字の元になる文字ですが、私は「自然に無理なく」って意味だと考えてるんです。器を作るときは、こんな風に作ってやろう、なんて思っ作ります。風土に身をまかせて、大らかな心で作る。窯に入れたら、窯神さまにまかせ。火や灰の具合で仕上がりは想像と随分違うこともあるけど、出来上がったものは愛でる。神様が創ったものだから…。」楽しそうに成田さんが言った。

すごいなア…自然も神様も自分も、すべてが混ざり合って器は出来るんだ。私、さつき成田さんの器を見て、春の生き物みたいな躍動を感じたんですが…  
「そうなんです。以前に春野菜が力強く土から出てくる様子に感動を覚えたか

ら、そんな思いが制作の時に含まれたのかも知れないね。そんな風に器をただのモノとは見ずに、身近なモノにも宇宙を見るのが、日本の文化なんだと思います。日本人は稲作を中心にして土地に定住してきたから、豊かな土や水をもたらしてくる自然に神を見て、敬い受け入れてきた。でも雨に乏しく農耕に適さない土地を持つ国の人々にとっては、自然は人間に対立する厳しい存在だったから、生きるために自然と闘ってきたんですね。その人間と自然との関わり方から、自然と共存する文化と自然を征服する文化が生まれたのだと思います。これが、現在に続く生活習慣や芸術作品の違いになっているんじゃないのかな。日本の建築も、風土から『自ずから』生まれてきた文化ですよ。

そう、日本の伝統建築である「木の家」は、日本の自然と共に生きる日本人の知恵から生まれたもの。…そうか、日本人は今だって、自然と先祖に深くつながっているんだ。…じわじわと湧き上がる悦びで、まめこの胸は温かくなっていった。

モノがあふれる現代では、土や木という自然の素材から自分で物作りをすることは殆どない。でも、「土」という自然と自分を一つにして物を生み出すことが出来たなら、なんだか新しい世界が見えてくるような気がした。  
…よし、挑戦してみるか！  
私の中から、どんな器が生れるだろうか。



1 壺には「自ずから」という意味の甲骨文字が。  
2 お茶の色が映える、白磁器の茶器。  
3 南かつの陽が入る心地よい作業場で心おきなく作ろう。

